



内閣文庫蔵

一四	三五	和
五八	九	針
袋	冊	紙

内閣文庫	
番號	和 32759
冊數	8 (1)
函號	141 86



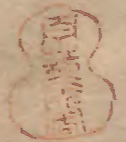
圖210



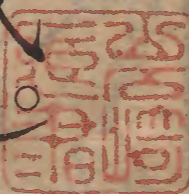
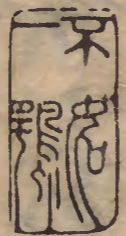
武江年表

江戸書鋪

青藜閣



武江年表序



龍泉大阿之塵。於豐城也。藉
 蔚紫之柔騰。誇斗牛之間。其
 威靈如此。而終出於石函。且
 雌雄似雜。鳴呼。何頭海。豈
 聊。一。在哉。隆然。其。至。復。也
 匹於延平之津。則。其。我。可。為。知

武江年表序

立江全 卷八
矣。其害一可益見矣。由是歛之嚮
似可怪者。即足泉阿之威
靈。取以傳于萬古。而不磨滅。而
顯悔之取。關係為家大矣。豈翅
象。何凡物之有匹。自有其
數存焉。何桑受之失。得哉。
友人齋藤月峯。寄所職之稿。

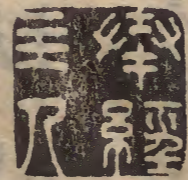
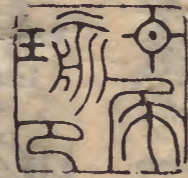
著書者千種。既行于世。今
茲又著武江年表八卷。分
為雌雄。先取其雄。四卷。持
之。其為事也。自慶元。韓韞
迄于今日。大之。天災地妖。坊
街之沿革。世態之遷流。物
之權輿。事之興廢。小之。少

人之生率神佛之啓合龍及
風謠俗談稱玩戲具。經四維
不遺攬按尤効。凡二百年來
之事。該一洗一來。隨求隨
在。族老受其易終。而更無
繼。豈無繼哉。事勢缺掌操
觚不苟。退待未日耳。其至

如象阿復匹。至麟捲沙彩
光射波。且生美。可全見矣。
其功可愈知矣。樊剗此編
之。雖鳴以待來日者。亦取以
地。雌雄相匹。傳于前古。而
不朽也。與其何憂之。須
日。剗剗。發先卜吉。仍舊

貫乞方。朱亦不敢。便題
蓋辭。以為延。平前。為。公。
系。永。二。年。屠。雖。心。重。三。月。
上。游。

荆山陣人源瑜



七十老戰驅親親。紙扇藍
輿教太平。宮朝貶孫謀臣。列
國日光高照海東城。
試神劍罷。并收權二百年。
間不動兵。官家今日真無

事、畿、震、高、歌、唱、太、平

四月十七日作二首

右二絶句若文化乙亥夏

日光宗廟帝忌之辰鵬齋亮田翁

之作手親筆取以贈先考也之取

以弁於卷首云

月峯誌

提要

○慶元より昌隆昇平の化光世も被り穀下の甘露日不陰せり此故不
 遐隔僻境の人とりとも千里を遠くせむ厥佳慶を着願慶大と
 作くところ響か父祖の名所國會ありて浪親の琴と一不余ら
 歳事記を編して示導引とい再此輯をふ一村淳聖慶のあけ
 在長極華の梗概を知りてむるの一助とい

○此編并載る所の中人以上の身同不解ると云ふ一々地理の沿革
 或は切間の風俗事物乃指要と云ふまゝ獲る不隨う徳と素と
 公迎乃御事の切ひ知るべしあははたぬく傳軍せる事も深あるべ
 したる并漏せり

○昔の元以来新地を撰てまは流産列居の落邸地を阻く不不播
 奇社氏屋も地を編て新創一或は其後の書も撰て慮を
 異にするの類考ておふへりて此編并見算ふと云ひて一二を

河入國の後日尔行地志麻の鹽を江戸運送えんきうの爲彼地より船の通達を
妨さまたしめり小是今の寺橋の通ありとりのり天文より元龜のころより河津のり小田

○八月平河天満宮 河津内梅林坂より 河津の北平河江坂より

○夏津勢の多布せりくる若狭親橋の辺其まがや 小鷺湯風呂一ツを立ちふ

風長穢永紫一旗あり皆人取長見とて入る 集小出

○因幡山廣津寺今の下岩 小田系小寺が今年小系家滅亡の後江戸

来り今の昌年橋の沿地を軍庫店を営む此時の位指を希度和尚より小田

地へ ○天正の頂軍系小乱波風間とりのり強盜あり黨を結小田び陣中小田

忍び入て鹽をち以徳人取をりるる今年より河をへり逃小田退小田く小田

絶小田り小田 如家五代記

天正十九年 辛卯 正月間

正月冥八劍の徳家まへ家首の津安とりのり始々登 城ありと云

○十一月軍系諸社小津寄附願の津系平をのりる ○赤坂一ツ本町小田

○十二月軍八州通用のり小大判小判を造りぬ以時代浪一板九合

○小田系の靈風山神津寺今年後町へ移り後赤坂一ツ本へ移るまゝあつとりのり

文禄元年壬辰 十二月八日改元

河津城の西北の地大法書組宛宅地をのりる六組小分あり一書とりのり

六書まての地名あり 尾より書町

○田系山折々頼ち天正十八年小田系とりのり為玉一吸下一ぬひ今年

本館町の地尔寺院をぬ其まがや 移るるを和のち院まがやにまがや移るるを和のち院まがやにまがや

彼地の高岩も次子小田戸へりるる若系領城町の軍費入在同志方小田系家小田

一其の子あり父果て後小田系落去あり以年十五大あり小田系家小田のぬ抱

友誼を以て廓をひくけり尚元和の件小者其り又小田原の豪家増田を以て
友嘉明人小不靈喬といひ服業の方を授けり一が如家あてて後江戸小者
本町に下目小者といひ波某と信る小大小者
ありてはる今人化人のあり製せり

文禄二年癸巳 九月間

天正十八年の後品川へ寺地をゆり一日照山法孫兵衛英登今幸

道三河屋へ移天和三年品川○惺窩先生飯欽始て江戸へ下り惺窩の室

我有我有台命を傳へて貞觀政要を讀まし一困暇四景我有解の文を中編

飛りて東軍の遊遊とせしは系と士が武時陽田流波を云々又は是れ文集小

たうあさもうくやとあを抄りゆむ秋の月の東海の共々

○天正の頃常陸國江戸崎やりの小不修徳忌一羽と云兵法の名人

あり土子泥か岩間小徳根岩菫角と云て名を得たる女子二人あり

徳忌之病の時菫角の病人を見捨て逐電江戸へ来て微塵流と

品川一派を起りて女子ふく随一上見ぬ徳忌の勢ひを以て一羽と

二年と云病死しり友人の女子菫角が本を以て誼情りぬ

人の内江戸へ下りて菫角を討べしと誼一寢をとりて小徳おあり

う小徳の江戸へ報く泥か岩の困ふ止り麻島の社小菫角相伝を祈る

小徳江戸へ下りて文禄二年九月十六日日本橋あり菫角小徳

より官府より此事を以て刀根岩を預り木刀の仕合をゆり一あり

一あり友人木刀を持て立合りて菫角打負ふとせし場より逐電して

行方を知るはし以上中書代記の文を畧し中尾菫角編の表女子と云

同三年甲午

九月九月千坂大橋を始て掛く此地の誌も同不徳時控現別為田院の記録不

橋板ありありあり橋板倒して船を斃し船中の人あり不潔不淨名度無時控現小

移りて後後 ○今年米穀豊饒あり

○小田系不老山壽松院今年尚地小移させしれ今の能治橋の向ふ
と院をぬくる後年神田柳系の辺へ移り又後年へ移る

文禄二年乙未

武蔵小別所先次と書書以武蔵と ○小田系當知山本誓寺江戸小移し
あひ日比谷橋所町の辺に地をぬくる後年喰町の辺へ移り天和二年
の後今の地へ移る ○若長貝屋集云舟町と日市のあひふちひ
さた橋只一ッあり是ハ後渡の橋あり文禄二年夏のあひ日比橋のり
あひの残籠を捨たせし水糸跡うち交りてありしハ
官府へさしあしりましりけ橋を残籠橋といふとありしと云ふに船町
兼日市町ハ今の残りぬ橋のあしり小丘一橋あり

慶長元年丙申

七月間 土月二十七日改元

一歩兼小別金始て通用芝草金 ○六月十二日系所歳内并東法山大

難又水危障毛長井 ○閏七月朝鮮人乗艘 ○閏十二日大地震月と途々

止む ○後河臺を築くる ○多田宗玄といふ人靈告を著りて京都

東山の辺より茶師像を拵りて本座を安んず今の多田の茶師あり

○税町常仙寺宗基宗茶師を安んず

同二年丁酉

邪田不老山感應寺宗刹屏山日感上人あり此寺地不詳然七年
ちを建つ今若沖小丘邪田感應寺といふ

同三年戊戌

松平為後ち後州より江戸後河臺の下へ移る後河臺永正元年小
移り今の所へ移る

○八月三縁山坊と寺日比谷より今の地へうつる寺ころハ今の寺ヨ
ウの南日比

谷町の方ありしとこの辺をひや町とりするむら八潮入の地ふしと漁人海中不枝竹の竹を並べ置く魚の入口を竹で充つことまきひびといふ字あり今も海苔をとるふしにヒビを用ひひびをききをかひりの住居の地あるひひや丁といひり後まはふらうのききてもひびや町と号しける後り其口とありしむら青町跡方ら町もいひ地ありしと後年約止去お店へ移り

慶長己年己亥 二月四日

二月令別山純室方天 神内彦尔軍剣 寛永十二年

寛永十二年 神内彦尔軍剣 後年約止去お店へ移り

同又年庚子

小判小光次と異書せしを極中くごくに改めり 光次ハ徳宗の父系あり

○始て系於不徳月代を重る ○池上本門と大塔建立 聖年小いり 令く改銘を

同六年辛丑 十一月四日

八月大小判挺銀の形制を定めぬ 渡河江戸 大黒銀もい時より繁る

○貞観政要板流 孔子家語武行七書板行せしめぬ 清治世以来の刻本

○安南始て奉書寛永九年まへて通洛而迄東埔塞始て奉書寛永 かのち

己年の后絶るふ必呂宋始て奉書寛永十八年迄今年より寛永 かのち

まへて二十三年の呂宋舟中船とて我必く商人亞馬港ノヒスハニ遷環安 かのち

南呂宋木の國く小年毎不行て六高賣し船亦中移り高小 かのち

本年く不絶とあり 以上奉慶報 後而載

○十月十六日大地震房総の山を崩し海を埋丘と成又海上俄り潮

引きて二十餘町を汚し成る十七日潮大山の如く巻上流死骸

○十一月二日己の刻渡河町事く恐ろし火をわび大焼亡不江戸町

一字も跡く人多く死す早亮町中早尊板火事絶り以序少皆

東の國より舟ははりの玉乃江戸うへ水とひりの角田川あり

○閏二月朝鮮信使初来聘 正使長祐吉副使 慶選準丁好寛 ○八月八日客星現天

慶長十二年戊申

林道春先生泚儒若小命をうらむ世時と先生没後五年

同十三年 己酉

二月に日月の容方ありて多現 皇幸代思合小方形 月出満没如菴

○二月島津度琉球を征りて仲山生尚寧を將ひ来り

○八月阿蘇院始々入貢奉書 唐船始々来

○相草所創林 一説元和元年ともいふ ○秋品川海乃前島山際より海船まで二十

石所乃送幅を度けりて是れ還自中をささりあり

同十八年 庚戌 二月閏

芝愛宕権現本社 田福寺もこの時建立と元和二年の丙辰 死行小堀のりらの初ありと云う

○七月十九日勅一ヶ坊上寺十二世貞蓮社源長上人 善光親智坐所の 遺りひらげり今 大層とありぬと云

○八月琉球始々致府并江戸 泚城入貢生尚寧来聘

○官醫吉田宗徇卒 其子宗達又良医のゆゑあり大橋宗桂 也宗徇の男あり其基圖式一巻を著け

同十六年 辛亥

正月二日竜口蒲生度海落火中門外仙人罹漢の彫物ありて災孺

ありしう世時焼りてと云 ○琉球聘使来 ○京中并耶蘇宗再葺

○龍徳山雲光院 あちのつぎ 了喰町の 燈あり ○六月廿二日加孫肥後と清正卒

○官醫養安院正徳卒 正徳十七年五月と号し山城守の人あり曲直原乃この門人ふ

あり後傳を嫡子田小瀬て別在り退居也

慶長十七年壬子 十月四日

亞馬港即亞あまがらよりめく奉書いひか元和七年と新譯西把弥亞始あまがらく奉書其の由あり○七月廿四日大敷降おろ○大寺造を清宗同於殊せし管帳を好む 辻切を好むの爲堂あり

同十八年 癸丑

漢又刺亞始うんげんらやく奉書○六月七日津田社地ある南傳了町あ始く津藤あり○九月千葉家後統国分ちをけのうらを清心務まきうらといふ人先祖お傳乃捺指を牛清前あ寄進せし○十二月耶蘇宗やその若浅宗あ終く殊せし

○徳盛勾崎甚内うらさき同取小殊せし海軍元を戴の迎を以の刑罰場を以取の擧 今も甚内擧といふ八月十二日を今もまつりといふ

同十九年 甲寅

那波道圓ななみち 姫路毒将高ななみち 又小隨あつゝ始て江戸へり此の其後あり廿九日の時把州 後の擧きあり把州へり

○八月廿八日東刻大風揚上寺山門あ折れ給ふ山門倒ある人家損も和川九品も入重の塔倒ある又安二丙寅年滅統せしこよりの九品も系洋妙也 百六十九年を經く滅せしい 同人の自集本因あり

○九月南蠻人阿茶泥人來朝あ 此の所よりヤニヤウスあり地取ヤマ 阿茶泥人千々あありい 友町といふ

○十月孝長あ長見あ集減あ寫奉十冊編者三浦清心ハハ家系小はハハ一才之京奉ら 又長寛永との筆記ありい ちか來入代あの事あを抄録せしあを水來入代あ記あと題しあ刊行し 中條の抄録を孝長見集減と題しあこの孝長見集減を抄録しあて中條あせしあをいふ

己年閏記事 左記も和路の六重書あり長久保集を抄録也

節用集あとに子小棒^{しんぼう}はまゝなり跡^{あと}はりあり今も年々小紋^{こもん}の
書^か家^け方^{かた}部^ぶといふ跡^{あと}を知^しるに實^{じつ}小^こ菴^{そう}の御^ご代^{だい}の一^{いっ}盛^{せい}事^じあり

○好古^{こうこ}日^{にっ}珠^{しゆ}云^い信^{しん}小^こ菴^{そう}挑^{てん}灯^{とう}ハ豊^{とよ}后^ご公^{こう}の時^{とき}始^{はじ}て製^{せい}以^い上^{じやう}下^げを友^{とも}曾^{そう}を以^もて
編^ありて板^{いた}を用^{もち}るハ考^{かう}長^{ちやう}以^い後^ごのゆゑ云^い天^{てん}正^{せい}以^い前^{ぜん}の挑^{てん}灯^{とう}ハ菴^{そう}小^こ紙^しを
粘^ねりて用^{もち}小^こ男^{おとこ}山^{さん}安^{あん}居^いの頭^{かぶ}の屋^や不^ふ用^{もち}る考^{かう}は遠^{とほ}製^{せい}あり今^{いま}菴^{そう}考^{かう}を
幸^{さい}中^{ちゆう}重^{じゆう}ある合^あ蓋^{がい}ふもつたてりて製^{せい}造^{ぞう}以^いとあり挑^{てん}灯^{とう}のつゝ山^{さん}の
骨^{こつ}董^{どう}集^{しゆう}ふへ

○二^に味^{あじ}線^{せん}始^{はじ}り本^{ほん}邦^{かう}不^ふ後^ごり来^きりハ水^{みづ}福^{ふく}の以^いりて泉^{いづみ}州^{しゅう}隈^{かゝ}の岸^{きし}
阪^{はん}り替^か者^{もの}中^{ちゆう}小^こ法^{ぽう}といふの浮^{うき}弘^{こう}といふ世^よ上^{じやう}考^{かう}一^{いっ}般^{ぱん}ふ柔^{じゆう}べりち
元^{もと}和^わ寛^{かん}永^{えい}の頃^{ころ}ありて○泉^{いづみ}及^{およ}隈^{かゝ}の錢^{せん}屋^や不^ふ安^{あん}小^こ西^{せい}清^{せい}年^{ねん}清^{せい}考^{かう}明^{めい}人^{にん}小^こ
考^{かう}りて中^{ちゆう}判^{はん}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて
考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて

考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて
考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて

考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて
考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて

考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて
考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて

考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて
考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて

考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて
考^{かう}りて小^こ男^{おとこ}の以^いりて製^{せい}以^い○未^み遊^{ゆう}集^{しゆう}云^い考^{かう}長^{ちやう}の頃^{ころ}の風^{かぜ}を古^こ画^がを以^もて

元和四年戊午

二月間

江戸後通事

江戸後通事あり

今の江戸後通事の
通事ありといふ

○日本橋通事

○江戸城の辺より火梯田迄焼爰○十月宮の刻長雲公 慧母が

○月白の勅堂江戸再建十一面觀世音を安んずる東叟山形公等と

あらしむ 中真窟山秀
筆信あり

同又 年 己未

夏より冬までありて毎夜白氣東南西北の角の如く長敷十丈又
慧母東叟あらしむ火さすの如し

○又月より八月まで大雨又穀也といひ人多く死に

○大坂江戸書始 ○長谷川忠房と云ふの久保八幡又徳内り
時の鐘系刻後改室中甚切趣しく稱る ○九月十二日得富先け年

九十九才門人林道春先け六りのも奥なり名波田増正云
麦系得菴松永昌三宅寄 齊よりんこの世小は西

同六年庚申

十二月間

後叟山普門院陽田川の辺より龜戸村へ移る ○二月十日日後友 代

光孝事 九十二才

○十一月二日増し中真親智園作入寂 七十七歳

○江戸通事始りて通 ○日本橋を築せしむ 其除のむ小築せしむ
なり日本六十歳長の法度

古多行ありおまらふおまらふ名つらうた或ハ
日教六十歳日ありおまらふとて通事以

同七年辛酉

二月觀世寺文一代能具行を揚新東洋

○九月廿二日小堀遠州侯上家殺殺良と朋友をよするの候とて新東
川の中より酒舟出せよと送しきりて

為り来んとちたりもわし一人にさしつかせせのさしつかせあり

○十二月十三日織田有樂兵衛卒

七十才恒居の町をえ敷新屋町と云
今小あり有る所恒居あり一あり

元和八年壬戌

活所遺稿

壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春 諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に軍を山下向わりの紀行を定ま海送泥とてあり

十一月十六日

源通村

源通村に軍を山下向わりの紀行を定ま海送泥とてあり

源通村に軍を山下向わりの紀行を定ま海送泥とてあり

同九年癸亥 八月間

正月の復遠澤郡統邑徐動溪等より小親なるもの二名を書し

歌を掲る ○正月又日智米白道情隨意上人寂 七十に及ぶ人を世の煩を
の弄りわたり人そみ

出の多きを中より取りて其の年中
社田の地は清住を院創を檀林と云 ○芝坊より山門清再建

○十一月十六日基作奉因坊日海寂 六十に及ぶ事あり
一書し六月あり

世年間記事

女奇形妓を捕せしれ男奇形妓と云 かゝるもの多きあり捕せしるを
括して毛高と云ふ男の奇形あり

○奉祈一月より葛西より船通一々二三に又の船を掛

ておろせし 船通

寛永元年甲子 二月晦日改元

停勢海難寛より長官おに市太神を江戸日本橋通二行同

おろす同十年より今の地 養源町
代地 延慶ありし

○長安法中靈愛を感し永代島子八幡宮を勧修を同八年再

無あり ○目黒村不動堂の再建 ○浮西把孫亞復系

○東叡山寛永永より所建を岡山慈眼大所あり 幸海合考ふは地は後堂を原の地を所あり一西あり

後堂の地は所あり一後堂をさくくと所あり一を思ふくと所ありのみ唱へし一永くこの地の名をわたりしなり小所所建の地あり一を以て今の地を福さう又比叡山板本の名をさうし一入道村の町を板本町と号し

○道平山靈巖を宗創 は時今云々巖高の地之権を又巖と人地をを以て地邊を永治く建之あり一あり

○明志が助寄を撰く号 はの板本町と号し天六日具行は

○二月十五日より中村勅之高く寄為は地 あり一古今

あると今目黒 ○三月十日より中村勅之高く寄為は地 あり一古今

○十月十五日小柄永徳所建現社改の扉を改むる二文字現は之なり あり一古今

あり一古今 ○三月十日より中村勅之高く寄為は地 あり一古今

○十二月朝野人素勝 正徳通政を支郵出副後通

寛永二年乙丑

湯島小幡祥院創 毎山茶妙心渭川劉和尚この時を報慈山天沢と云寛永十一年

○南八丁堀一丁目永より稻荷社を舊社あり 此を以て永小町所建

○八月猪狩一堀大工の あり一古今

○二月寺小宮 あり一古今

同二年 丙寅 四月

○二月より八月を法皇昇殿 ○二東河津城を築始 あり一古今

○耶蘇字再獲 ○九月上野小

神祖神宮神達立 高平郡高平の神祖神宮神達立 隆興因於境と居せしむる今高平ありとあり

○十月吉原又町のあぐいし 善徳殿 すみ町と高橋のすみ町あり 今高橋一とあり

○武蔵志料 武蔵志料は秘編を引く實永二年十二月十日鳥丸大納言の御東宮へ衣衣を忌けし秘編の入りしより一板その附の人海軍人ゆき指ししり今より風流ある人あり 海軍のと云あり一けりとのあり

○武蔵志料 武蔵志料を引く實永二年十月十日鳥丸大納言の御東宮へ衣衣を忌けし秘編の入りしより一板その附の人海軍人ゆき指ししり今より風流ある人あり 海軍のと云あり一けりとのあり

○武蔵志料 武蔵志料を引く實永二年十月十日鳥丸大納言の御東宮へ衣衣を忌けし秘編の入りしより一板その附の人海軍人ゆき指ししり今より風流ある人あり 海軍のと云あり一けりとのあり

寛永元年 丁卯

三月源通村に御卜向あり

警のさふーされく武蔵のさのゆりの麻糸川のさふ

○東叡山仁王門常光法苑 二ツ子 経堂多宝塔等神達立 比叡山 宇治郡

○四月八日芝慶宮山権現社火 災後再 法造堂者 ○八月法あり

○大地震 ○十一月塔伽沙古来 後の名を 理伽ト云 ○新羅より琉球へ渡り一石丸 すんご

の将薩州へ始まる海 石丸の編の石母子小石丸の二十年來のさふあり ありしに石丸をた方治實文の以より石丸あり

同又年代辰

正月二日系栲紀作命を又古まとのりの元來と無事ありしと大伴河東弘治大伴の示現を夢り六字のなを記を書けしりて二月廿一日なを記を書けしりてなを記を書けしりて 聖徳太子の御宇とあり

○正月廿日 柳堂小於之河連舟會あり

足は極速舟會の始りありと云
兼意日朱十一日小あつての
三夜思勝よりあり一人たり
百二十とりの小舟あり

○五月廿二日入若正覺寺開山慶育禪師寂

觀音のふりて孫子上興指すりか
上徳小居りまゝ一船停友一舟亦小

○一乃流小野派劍術祖小野決所右衛門率去

○十二月十日官医送今大語道三率 八十三

○所く辻斬り

○十二月各後徳元

○江戸中より白旗を揮ふ事この人小居り

○江戸中より白旗を揮ふ事この人小居り

○江戸中より白旗を揮ふ事この人小居り

寛永六年 己巳 二月圓

六月土旬より目黒村不初を快然成就とるよりあり像并

江戸中老翁男女群集以 ○七月廿七日玉室澤庵の土俵を

流さるは菴の羽衣上の山玉室の奥に擲金く競く

天分南北両見飛 何日舊栖同翼帰 聚散無常只如此

世情禽亦有樞機

草鞋竹杖與雲飛 舊院何時把手帰 水遠山長猶絶信

別離今日已忘機

八月十五日は菴完上小居り

完上川子瀬川月山流さきてまゝ一浮世不すむひもあ

○あひまきよこよひの月をみちのこのあまの松のけふこんといふ

二所流罪のゆゑ一はは菴高き備をえんて

あるべしこの時 仙洞のゆゑこけり

五くおれ海の底も玉の室もあつてのころあつたの月

二十

二十

二十

はこら民名の相平小

江戸味噌を二まのすりてつまのみにとまをりのつる月

○今年より武家くしは書を並る場も於ては斬あり一れを

寛永七年 庚午

正月八日鴻田川あり

古塚のきりし松柳のあつらひをまゝとむ首しる處と 持時が伝

○二月十日日醫師甲斐進奉率 百十七やりのひきのあまて後り一や作
更長房のちをまゝありゆりゆりうひの

徳平一後十六後とあつらひりふ
と名著述の医書を抄録せりて ○二月小漢造生寺あり一布引祖師

像并込奉書あり○二月二日身丈久遠寺日蓮池上奉門寺

日樹宗瑞日樹伝及坂田小配流 ○六月琉球人來碇

○同月旨大地表毛降 ○八月山王社法造營

○魚籃觀世音之田の地小安重以 軍山法皇上人を奉るの由
り勢きり西とりふ

○十二月廿三日大地震は刻光が流行し一を多とすまゝあり

同八年 辛未 十月閏

三月十九日江戸中ノ所降 ○同月日法皇并露降

○四月二日法皇を奉り上 ○去年より今年も六十尺は癩瘡を病

む者多し ○東叡山小大佛像 大六
新造あり

新額割りて碑しを後
方路の以細像ふありとむ 清水觀音寺營造 ○八月大風家底を壞ち樹木

を折了 ○十月天降 ○十月十二日後及氏及代進を奉平 八十丈

○十月十七日上野大石焼落立 依る大橋落之と
形より言一丈八尺余

同九年 壬申

諸家深秘録云今年より吳呂仙臺の米穀短少江戸と云今
下江戸之云云吳呂仙臺のは多りて其令一ありて七之江戸年程あり

○中村幼之介の多居申揚より称宣町へ移る今の入形町あり

○孝廬新刊云 寛明日記寛永九年の件云英令つる五月結草
御留中よむる玉初より六十日の内外と見えたり

○玉室腰店二所漏虞より召還しぬ七月廿七日は廢すなり

○井田の廣徳寺小寓以去の冬腰店に駒込堀氏不寄居を翌年
二所を大種小降せりぬぬ以去腰店實永十三年漸次小寓居あり
以去西居を願て檢束處よりぬ

寛永十年 癸酉

上野忍う忍林送春先生別荘小先重徳を建し尾筋の所建之は正
徳の事あり

○正月廿一日廿二日諸國大地震小田原の
別荘を壊し同廿六日申刻大地震

○武州忍の増濟番帳とありしは今年松平豆州侯にありは城番の

面く江戸一帯宅地をぬりしを忍系亦忍町とよみり

○正月より六月まで流あり南流す町と下田の水川を堰ぬ町屋中
せりし○都内内芝居は先ありて真行そ地
未詳

同十一年 甲戌 七月間

○正月十八日増上り了學上人念佛三昧中へ臨終しぬ案案其の後
身骨煮く舍利とありせんま
せんま○二月二日 御株小舟の御能芝居町又
御株をゆりしを青羽を揚るは是より始りけりしと一或記に

見えたり○二月九日お基作大橋宮本桂八十才

○二月十二日お白雲月を貫く○王子権現社 其は神明云
再久保八幡云 同是正勅堂考御造営ありゆきもは再
建たり

○品川御堂を本堂ぬ定橋二玉門は再建

○平塚明社社海邊立社不遂く誠然に

○尚年より山生法家控領り大なる積と成り

○宝林山養正寺院田代地より信谷を治す

○七月琉球人來聘 正徳作敷子合衆にあり一系二系とす ○村山又二席其居暮庭町に

於て姑々の真引 市村羽左馬 ○八月八日或る災の活家の室 あまのむ

齒をあらわぬひ終ふ今日終由り せんどう 臨終 おひげん 送る由りむ たを

馬より若家を祈り ちんげん と相ひひ 版念書をもし出暮あり今日

○明人安計 後池の上より 江戸日平橋安計町を治り又お州三浦遠見村を

願も其妻如満尼今年七月十六日終遠見村澤止より墳墓あり

安計より忌日 おひ 墓 ひ 禱 ひ 稿 ひ しくありとす

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅外刻大地震年未刻又地震あり ○後府山立高始り

○春鳥丸大船の先座 ちうひつ 今更下向あり はの 記を春の曙 あけぼの せり

はの 世に はの 向あり はの 又源通村 はの 向あり

春あ はの 林の葉も はの 時 はの 末 はの 末 はの 末 はの 末

○安宅丸の舟船修置より来り 一説に寛永十一年とも云 柳川町の辺に居たり

○二月天台院 おひ 宗 おひ 宗 おひ 宗 おひ 宗

○六月十三日大風遠呂豆丹後海の船八百艘被損 和田倉山門の内より

○七月天 おひ 天 おひ 天 おひ 天 おひ 天

○八月 おひ 八月 おひ 八月 おひ 八月 おひ 八月

○八月 おひ 八月 おひ 八月 おひ 八月 おひ 八月

船の幕を荒木戸の上五張人形衣袋結構をとりて又舟の板は
舟の板敷の義をとりて舟の板敷の義をとりて舟の板敷の義をとりて

實永十二年 丙子

二月元日 〇高田八幡宮勅清はつねの御みまわり

〇大城おほしろ御みまわり附つけ排はら形かたち御みまわり

御みまわり

〇大樹城おほじゅじょう御みまわり

人法にっぽうの御みまわり

南みなみ向むかひ御みまわり

〇井の頭いのがしら御みまわり

〇四月しがつ御みまわり

〇五月ごがつ御みまわり

〇新あらた御みまわり

〇御みまわり

〇御みまわり

海軍の沿革等あり

○十二月朝鮮人來聘

正俊自藤任統副後東濱令世深
遊事青丘其床 張殿古抄古之

武江年表卷之一 畢



